

英文要旨

A copy of translation with notes of Chun-qiu Fan-lu xun-tian-zhi-dao.

*¹ Tomotsugu SAKAMOTO

*² Miki ZAIKI

It is said that Chun-qiu Fan-lu (春秋繁露) was written by Don Chong-shu (董仲舒) in Han (漢) period. This Paper is a translation, annotation and consideration of Chun-qiu Fan-lu xun-tian-zhi-dao (循天之道).

キーワード

陰陽 気 生命 養生

* 1 香川高等専門学校高松キャンパス一般教育科

* 2 比治山大学非常勤講師

『春秋繁露』訳注稿 循天之道篇

坂本 具賀
財木 美樹

- ④ 梅機 『諸子平議』(『春在堂文書』所収)
- ⑤ 劉師培 『春秋繁露斠補』(『劉申叔先生遺書』所収)
- ⑥ 『今註今譯』 賴炎元註譯 『春秋繁露今註今譯』(台灣商務印書館)
- ⑦ 『校釋』 鍾肇鵬主編 『春秋繁露校釋(校補本)』(河北人民出版社)
- ⑧ 『新譯』 朱永嘉・王知常注譯 『新譯春秋繁露』(三民書局印行)

凡例

一、本訳注は『春秋繁露』の「循天之道第七十七」に対して訳注を施したものである。

二、本訳注は蘇興の『春秋繁露義證』(宣統二年長沙刊本)を底本とし、原文と【校記】【書き下し文】【注】【現代語訳】から成り、内容によって適当な段落に区切つたものである。

三、各篇の冒頭には簡単な要旨を述べて読解の便に供した。

四、原文は極力底本の文字を用いるようにしたが、写植文字の制約により、原文とは異なる字体となつた文字もある。

五、原文を改めた場合は、原本の文字は()で示し、校訂及び増補した文字は〔 〕で示す。その詳細は【校記】で述べる。

六、【書き下し文】は校訂・増補した原文に基いて書き下した。

七、【書き下し文】では、脱文の字数が不明の場合は、……で示し、特定できる場合は□を一字として示す。

八、【現代語訳】では、補訳は()で示し、補注は〔 〕で示す。

九、校記及び注で言及する書名・人物は次の通りである。

- ① 宋本 宋嘉定四年江右計刻本(『北京圖書出版社古籍珍本叢刊』2所収)
- ② 蘆文弨 『春秋繁露』十七卷(『抱經堂叢書』所収)
- ③ 凌曙 『春秋繁露注』十七卷 嘉慶二十年輩雲閣凌氏叢書本

循天之道第七十七

以下の各節の校記にも述べる」とあるが、本篇は諸家によつては本文にかなり異動がある。おおよそ蘇興本に従つて、以下の十一節に分けて考えた。

第一節 天には二和と二中があり、それが無限に循環することにより万物が生長する。人の場合も天の中和にしたがつて身体を保養することにより長生きできることである。

第二節 陰陽の気は六ヶ月ごとに一度つつ極盛となり、一年間に二度合わさる。人はこの陰陽の気にのつとつて身体を保養する。

第三節 天地の行いは中ではじまり和で完成するとから、和より素晴らしいものはないとする。

第四節 孟子の言と公孫尼子の『養氣』をひいて、中和の重要性を述べる。人の感情が一方にかたよつたとき、中和にたちかえる必要があるといふ。

第五節 人が長生きするために重要なものが氣であり、氣を足のほうから身体に取り入れ、内から養わなければならぬとする。

第六節 人は天地の運行にしたがうことにより天地と一体となるので、房で遊ぶ場合も、天地の節と同じリズムにしたがつて、気が極盛の時でなければ遊ばないとする。

第七節 天の氣は人にとって衣食より大切なものであり、氣を大切にすることによつて長生きするとする。

第八節 生命を養う上での大切なことが述べられる。生命外部の安らかさを保ちと生命内部を充実させていくこと、身の回りのことに細心の注意を払い、四季それぞれにふさわしい生活を心がけ、四季それにふさわしい食べ物をたべることなど、よくよく理解しておかなければならぬといふ。

第九節 季節ことに適した食べ物があることを述べる。季節ことにおいしい物が生じる。そこで冬と夏にはそれぞれの季節に適したおいしい食べものを食べ、春と秋には中和したものを感じ食すれば四時の和を手に入れる」とができるといふ。

第十節 食べ物をえらぶときの基準は、その季節季節においていふものをおいぶ」とである。天は人に利益を与えるべくその季節季節に食べられる物を生みだしてゆく。そのような天の意志をよく理解することだといふ。

第十一節 人の寿命の長短について述べる。身体に天地の中和の道を得たものは、長生きし、天地の中和の道を得ていないものは早死にする。寿命の長短は、人が天から授けられたものであるが、身体の保養の仕方の良し悪しに關係するといふ。

循天之道、以養其身、謂之道也。天有兩和、以成一中、歲立其中、用之無窮。是故①北方之中、用合陰、而物始動於下。南方之中、用合陽、而養物始於上者、美養於上②。其動於下者、不得東方之和、不能生、中春是也。其養於上者、不得西方之和、不能成、中秋是也。然則天地之美惡在中③。在兩和之處、二中之所來歸而遂其爲也。是故東方生而西方成。東方和生、北方之所起。西方和成、南方之所養（長）④。起之、不至於和之所不能生。養（長）④之、不至於和之所不能成、成於和、生必和也。始於中、止必中也。中者天地之所終始也。而和者天地之所生成也。夫德莫大於和、而道莫正於中。中和⑥者天地之美、中和⑦達理也。聖人之所保守也。詩云、不剛不柔、布政優優、此非中和之謂與。是故能以中和理天下者、

其德大盛。能以中和養其身者、其壽極命。

【校記】

① 蘇興に従い、「是」の下に「故」字を補つ。

② 「而養始美於上」 蘇興・劉師培に従い、「而物始養於上」に改める。

③ 蘇興に従い、「惡」の下に「在」字を補い、「惡」を「鳥」に読む。ただ董天工（『校釋』引）は「惡」字を刪る。また陶鴻慶は「惡は乃ち德字の誤りなり」という。

④ 「養長」 愈樾に従い、「長」字を衍字として削除する。

⑤ 「地」 宋本・叢刊本・盧本・凌本は「下」に作るが、文脈からすれば「地」のほうがよいと思われる所以原文のままにする。

⑥ 惠棟（『校釋』引）に従い、「中」の下に「和」字を補つ。

⑦ 「天地之美產理也」 蘇興に従い、「美」の下に一字脱していると見る。『校釋』は「美の下疑ふらばは德字を脱す」というが、「德」字であるかどうかは決定しかねる。

【書き下し文】

天の道に循ひて、以て其の身を養ふ、之を道と謂ふなり①。天に兩和②有りて、以て二中③を成し、歲に其中を立て、之を用ふるも窮まること無し。是の故に北方の中④にて、用て陰に合して、物始めて下に動く。南方の中⑤にて、用て陽に合して、物始めて上に養はる。其の、下に動く者、東方の和を得ざれば、生ずる能はず、中春⑥はれなり。其の、上に養はる者、西方の和を得ざれば、成る能はず、中秋⑦はれなり。然らば則ち天地の美は悪くに在り。兩和の處に在り。二中の來り歸りて、其の爲を遂ぐる所なり。是の故に東方に生じて西方に成る。東方の和にて

生ずるは、北方の起^レす所なり。西方の和にて成るは、南方の養ふ所なり。之を起^レこすも、和の所に至らざれば、生ずる能はず。之を養ふも、和の所に至らざれば、成る能はず。和に成るも、生ずるは必ず和なり。中に始まるも、止まるは必ず中なり^⑧。中は天地の終始する所にして、和は天地の生じ成る所なり^⑨。夫れ徳は和より大なるは莫く、道は中より正なるは莫し。中和は天地の美^ハ達理にして、聖人の保ち守る所なり。『詩』に「剛ならず柔ならず、布政優優たり」^⑩と云ふは、此れ中和の謂に非ずや。是の故に能く中和を以て天下を理むる者は、其の徳大いに盛んなり。能く中和を以て其の身を養ふ者は、其の毒、命を極む。^⑪

【注】

① 蘇軒は、『莊子』譲王の、

道の眞は以て身を治む。(道之眞、以治身)

を引く。

② 「兩和」は、東方の和と西方の和を指し、それぞれ春分と秋分をいう。

③ 「二中」は、南方の中と北方の中を指し、それぞれ夏至と冬至をいう。

④ 「北方之中」は冬至を指す。陰陽出入第五十に、

陰は東方より來りて西し、陽は西方より來りて東す。中冬の月に至りて、北

を引く。

方に相遇し、合して一と爲る、之を日至と謂ふ。(陰由東方來西、陽由西方來東。至^レ於中冬之月、相遇北方、合而爲一、謂之日) [日] 至る。

とする。

⑤ 「南方之中」は夏至を指す。陰陽出入第五十に、

初めて中夏の月を得、南方に相遇し、合して一と爲る、之を日至と謂ふ。(初得(大) [中] 夏之月、相遇南方、合而爲一、謂之日) [日] 至る。

とする。

⑥ 「中春」は春分を指す。陰陽出入第五十に、

生ずるは、北方の起^レす所なり。西方の和にて成るは、南方の養ふ所なり。之を起^レこすも、和の所に至らざれば、生ずる能はず。之を養ふも、和の所に至らざれば、成る能はず。和に成るも、生ずるは必ず和なり。中に始まるも、止まるは必ず中なり^⑧。中は天地の終始する所にして、和は天地の生じ成る所なり^⑨。夫れ徳は和より大なるは莫く、道は中より正なるは莫し。中和は天地の美^ハ達理にして、聖人の保ち守る所なり。『詩』に「剛ならず柔ならず、布政優優たり」^⑩と云ふは、此れ中和の謂に非ずや。是の故に能く中和を以て天下を理むる者は、其の徳大いに盛んなり。能く中和を以て其の身を養ふ者は、其の毒、命を極む。^⑪

中春の月に至りて、陽は正東に在り、陰は正西に在り、之を春分と謂ふ。(至於中春之月、陽在正東、陰在正西、謂之春分)

とある。

⑦ 「中秋」は秋分を指す。陰陽出入第五十に、

中秋の月に至りて、陽は正西に在り、陰は正東に在り、之を秋分と謂ふ。(至於中秋之月、陽在正西、陰在正東、謂之秋分)

とある。

⑧ 『校釋』によれば、冬至になるとはじめて一陽が生じ、万物が地下で動きはじめる。これが「始於中」である。夏至になると陽が極まり、はじめて一陰が生じる。これが「止於中」であるといふ。

⑨ 漢書は、『中庸』の、

中和を致し、天地位し、萬物育す。(致中和、天地位焉、萬物育焉)

『疏』の、

言ふことは、人君能く中庸を致し極め、陰陽をして錯はざらしむる所なれば、則ち天地は其の正位を得。生成、理を得るが故に、萬物は其の生育するを得。(言人君所能致極中庸、使陰陽不錯、則天地得其正位焉。生成得理、故萬物得其生育焉)

を引く。

⑩ 『詩』は『詩經』商頌・長發の一句。現行の『詩經』では「布」を「敷」に作る。

⑪ 蘇軒は、「天闕無きを讀む」とい、程子の、

今人、怠惰放肆せず、必ず太^{おほ}だ嚴厲なり。聖人は便ち自ら中和の氣を有す。(今人不怠惰放肆、必太嚴厲。聖人便自有中和之氣)

天の運行にしたがつて、身体を保養することを「道」という。天には（東方と西

方の）ふたつの和（春分・秋分）があり、（北方と南方の）ふたつの中（夏至・冬至）を形成している。一年のうちに（夏至と冬至の）「中」という規準を定め、その規準を利用するがそこでおわることなく、くり返し無限に循環させる。そこで北方の中（冬至）になると、（はじめて一陽が生じて）陰氣とあわさって、万物が地下で活動しはじめる。南方の中（夏至）になると、（はじめて一陰が生じて）陽氣とあわさって、万物が地上で成長しはじめる。地下で活動するものは、東方の和（春分）にならなければ生長することはできない。中春がそれである。地上で成長するものは、西方の和（秋分）にならなければ成熟することはできない。中秋がそれである。（ふたつの和は）ふたつの中がいきついて、（中がはじめた）仕事を完成させることである。だから（万物は）東方で生長して、西方で成熟する。東方の和で生長するのは、北方であらかじめ陽の気が発生していたからである。西方の和で成熟するのは、南方であらかじめ陽の気が生長していたからである。（北方で陰の気は）発生してはいたが、（東方の）和に到達しなければ生長することはできない。（南方で陽の気は）成長してはいたが、（西方の）和に到達しなければ成熟する「」とはできない。（西方の）和で成熟するが、生長するには必ず（東方の）和である。（北方の）中で始まるが、おわるのは必ず（南方の）中である。中は天地（の活動）がおわり始まるところであり、和は天地が（万物を）生長させ、成熟させるところである。そもそも和より大きい徳はなく、中より正しい道はない。中和は天地のもつともすぐれていて素晴らしいところであり、聖人が保守しているものである。『詩』に「剛健でもなく柔弱でもなく、政治はおだやかである」というのは、中和のことを言つてゐるのではないだろうか。そこで中和を用いて天下を治める」とができるものは、徳がとても豊かであり、中和を用いて身体を保養できるものは、寿命のとおり長生きする」ことができる。

【校記】

- ① 「十月」 錢塘（『藝證』引）に従い、「六月」に改める。「六月」は六ヶ月といふ意味である。
- ② 「久」 蘇軾に従い、「之」に改める。
- ③ 「是故先法之内矣」 蘇軾は「句に疑ふらばは脱誤有り」という。『校釋』は「是故先法之内矣」の七字を錯簡とみなし、下文第五節の「皆謂内」の句の下に移す。いま『校釋』に従う。
- ④ 「精」 蘇軾に従い、「精」字を削除する。「天道施、地道化」（天地施第八十一）のように「施」と「化」が対応する。
- ⑤ 劉師培に従い、「先」字を補う。
- ⑥ 「字」 盧文弨に従い、「而」字を削除する。惠棟（『校釋』引）はさうに「氣

男女之法、法陰與陽。陽氣起於北方、至南方而盛。盛極而合乎陽。不盛不和、是故（十）〔六〕①月而晝俱盛、終感而乃再合。天地（久）〔之〕②節、以此爲常、（是故先法之内矣）。③ 緊身以全。使男子不堅牡、不家室、陰不極盛、不相接。是故身精明、難衰而堅固、壽考無終。此天地之道也。天氣先盛牡而後施（精）④。故其精固。地氣〔先〕⑤盛牝而後化。故其化良。是故陰陽之會、冬合北方、而物動於下、夏合南方、而物動於上。上下之大動，皆在日至之後。爲寒則凝冰裂地、爲熱則焦沙爛石。氣之精至於是。故天地之化、春氣生而百物皆出、夏氣養而百物皆長、秋氣殺而百物皆死、冬氣收而百物皆藏。是故惟天地之氣（而）⑥精、出入無形、而物莫不應。（實）〔貴〕⑦之至也。君子法乎其所貴。天地之陰陽當男女、人之男女當陰陽。陰陽亦可以謂男女、男女亦可以謂陰陽。

精」を「精氣」に改めるが、いいではない。

⑦ 「實」 惠棟『校釋』引に従い、「貴」に改める。

【書き下し文】

男女の法は、陰と陽とに法^{のべ}①。陽氣は北方に起り、南方に至りて盛んなり。盛んなること極まれば而ち陰に合す。陰氣は中夏に起り、中冬に至りて盛んなり。盛んなること極まれば而ち陽に合す。盛んならざれば合せず。是の故に六月にして壹たび俱に盛んにして、終歲にして乃ち再び合す。天地の節は、此を以て常と爲し、身を養ひて以て全くす。使し男子、壯^②を堅くせざれば、家室せず^③、陰、盛を極めざれば、相接せず。是の故に身は精明にして、衰へ難くして堅固。参考文献故に其の化は良し無し。此れ天地の道なり。天の氣は先づ壯を盛んにして、而る後に施す。故に其の精は固し。地の氣は先づ壯を盛んにして、而る後に化す。故に其の化は良し

④。是の故に陰陽の會は、冬には北方に合し、物は下に動き、夏には南方に合し、物は上に動く。上下の大きいに動くは、皆口至の後に在り。寒を爲さば則ち沙を焦がし石を爛がす^⑤。氣の精は是に至る。故に天地を裂き、熱を爲さば則ち沙を焦がし石を爛がす^⑥。氣の精は是に至る。故に天地の化、春氣は生じ、百物皆出で、夏氣は養ひ、百物皆長じ、秋氣は殺し、百物皆死し、冬氣は收め、百物皆藏する^⑦。是の故に惟だ天地の氣は精にして、出入に形無きも、而れども物應せざる莫し。貴きの至りなり。君子は其の貴ぶ所に法る。天地の陰陽は男女に當り、人の男女は陰陽に當る。陰陽も亦以て男女と謂ふ可く、男女も亦以て陰陽と謂ふ可し^⑧。

【注】

① 蘇興は、『白虎通』紀綱の、夫婦は人に法る。象を人、陰陽に合して施化の端有るに取る。『漢書』に

「水火交感し、陰陽以て設くるは、夫婦の象なり」と云ふ。(夫婦法人、取

象人合陰陽、有施化端也。漢書華云、水火交感、陰陽以設、夫婦之象也)

同「嫁娶」の、

人は天地を承け、陰陽を施す。故に嫁娶の禮を設く。(人承天地、施陰陽。

故設嫁娶之禮)

【春秋穀梁傳】(『白虎通』嫁娶引) の、

男子二十五にして心を繕き、女子十五にして許嫁するは、陰陽に感ずればなり。(男子二十五繫心、女子十五許嫁、感陰陽也)

【太平御覽】五十八引『春秋元命苞』の、

水の立字は、兩人一を交へ、中を以て出づる者を水と爲す。一は數の始め、兩人は男女に譬る。陰陽物を交へ、一を以て起つるを言ふなり。(水之立字、兩人交一、以中出者爲水。一者數之始、兩人譬男女。言陰陽文物、以一起也) を引く。

② 「壯」は男子の生殖器をさす。

③ 蘇興は、「壯にして而る後に家室有るを謂ふ」といひ、『白虎通』嫁娶の、男三十、筋骨堅強にして、任じて人の父と爲る。女二十、肌膚充盈して、任じて人の母と爲る。合せて五十と爲り、大衍の數に應じ、萬物を生むなり。故に『禮』内則に、「男三十、壯にして室有り、女二十、壯にして嫁す」と曰ふ。(男三十、筋骨堅強、任爲人父。女二十、肌膚充盈、任爲人母。合爲五十、應大衍之數、生萬物也。故禮内則曰、男三十、壯有室、女二十、壯而嫁) を引く。

④ 凌曙は、『大戴禮』の、

故に男は八月を以て齒を生じ、八歳にして歯^ほつ。一陰一陽、然る後に道を成す。二八十六、然る後に其の施行はる。女七月にして齒を生じ、七歳にして歯^ほつ。二七十四、然る後に其の化成る。(故男以八月生齒、八歳而歯。一陰

一陽、然後成道。二八十六、然後其施行。女七月生齒、七歲而毀。二七十四、然後其化成。

を引く。「毀つ」は歯が生えかわるい」と。これから推測するに、男性は十六歳で精子が作られる体となる、「これが「施行はる」であり、女性は十四歳で初潮を迎える、子供を産める体となる、「これが「化成る」と云う」とであるか。

(5) 凌曙は、『漢書』顔注の、

凝は堅冰なり。(凝、堅冰也)

『丘子』の、

寒なれば冰を凝らし地を裂ぐ。(寒凝冰裂地)

『呂氏春秋』の、

湯の時、大旱七年、沙を煎り石を爛る。(湯時大旱七年、煎沙爛石)

『淮南子』鉢言訓の、

陽氣は東北に起り、西南に盡く。陰氣は西南に起り、東北に盡く。陰陽の始

めは皆調適して相似たるも、日び其の類を長じて以て侵く相遠し。或いは

熱、沙を焦し、或いは寒、水を凝らす。(陽氣起於東北、盡於西南。陰氣起

於西南、盡於東北。陰陽之始、皆調適相似、日長其類以侵相遠。或熱焦沙、

或寒凝水)

(6) 凌曙は、『越絕書』外傳枕中の、

范子曰へ、臣聞けり、陰陽の氣は處を同じくせずして、萬物生ず。冬二月の時、草木既に死して、萬物各おの藏を異にする。故に陽氣は之を下に避けて藏伏し、内に壯となり、陰陽をして外に成るを得しむ。夏三月、盛暑の時、萬物遂に長じ、陰氣之を下に避けて藏伏し、内に壯となる。然りて萬物親らして之に信す。是れ謂ふ所なり。陽なる者は萬物を生ずるを主る。夏二月の時に方りて、大熱至らざれば、則ち萬物成る能はず。陰氣は殺を主る。冬三月の時に方りて、地、内藏せざれば、則ち根荄成らず、即ち春生ずる無し。

故に一時度を失すれば、即ち四序爲に行はれず。(范子曰、臣聞、陰陽氣不
同處、萬物生焉。冬三月之時、草木既死、萬物各異藏。故陽氣避之下藏伏、
壯於内、使陰陽得成於外。夏三月、盛暑之時、萬物遂長、陰氣避之下藏伏、
壯於内。然而萬物親而信之。是所謂也。陽者主生萬物。方夏三月之時、大熱
不至、則萬物不能成。陰氣主殺。方冬三月之時、地不內藏、則根荄不成、即
春無生。故一時失度、即四序爲不行)

(7) 『論衡』自然篇に、

儒者、夫婦の道を説くに、法を天地に取る。(儒者說夫婦之道、取法於天地)

『山虎通』爵に、

王者は天を父とし地を母とする。(王者父天母地)

などとあり、天地を男女に対応させてゐる。

【現代語訳】

男との法則は、陰と陽にしたがつてゐる。陽氣は北方で(最初の一陽が)発生し、南方になつて極盛となる。それが極限に達すると(発生してきた)陰と合わさる。陰氣は中夏に(最初の一陰が)発生し、中冬になつて極盛となる。それが極限に達すると(発生してきた)陽と合わさる。極限に達しなければ合わさる」とはない。そこで六ヶ月ごとに(陽と陰が)一度づつ極盛となり、一年間に一度合われる。天地の節度は以上のことを不变の法則とし、(人はこれにのつとつして)身体を健全に保養する。もし男子(の生殖器)がかたくならなければ、妻を娶ることはできず、(女子の)陰氣が極盛にならなければ、(男子と)まじわらない。だから身体は健康で、衰えにくくたましく、(天から与えられた)寿命をへらすことない。これが天地の道である。天の氣はまた男子(の生殖器)を盛んにしてから施す。だからその精氣は堅固である。地の氣はまた女子(の生殖器)を盛んにして

から化育する。だからその化育は良好である。だから陰と陽が交叉する場合、冬は北方で（陽）と合わさり、万物は地下で動きだし、夏は南方で（陰）と合わさり、万物は地上で動きだす。地上と地下で（万物が）動きだすのは、日至（夏至と冬至）からあとのことである。（天が）寒くすると水を張り、地面を引き裂き、熱くすると砂を焼けこがして、石を焼けただれさせる。（天の）気が精密になることこのような状態にまで達する。だから天地の化育については、春の気は生長させる気なので万物が生れ出で、夏の気は養う気なので万物が成長し、秋の気は殺す気なので万物が枯死し、冬の気は収める気なので万物が叢される。こういうわけで天地の気は精密で、出入りする形跡はないのに、万物はそれに応じて行動しないものはない。これは貴いことの極致である。君子は（天地が）貴ぶものにしたがって行動する。天地の陰陽は（人の）男女に相当し、人の男女は（天地の）陰陽に相当する。だから陰陽も男女だと云ふことができるし、男女も陰陽だといつ」とができる。

三

天地之經、至東方之中、而所生大義、至西方之中、而所養大成。一歲四起業、而必於中。中之所爲、而必就於和。故曰、和其要也。和者天〔地〕①之正也、陰陽之平也。其氣最良、物之所生也。誠擇其和者、以爲大得天地之（奉）〔泰〕②也。天地之道、雖有不和者、必歸之於和、而所爲有功。雖有不中者、必止之於中、而所爲不失。是故陽之行、始於北方之中、而止於南方之中。陰之行、始於南方之中、而止於北方之中。陰陽之道不同、至於盛而皆止於中。其所始起、皆必於中。中者天地之道、太極也、日月之所至而卻也。長短之隆、不得過中、天地之制也。兼和與不和、中與不中、而時用之、盡以爲功。是故時無不時者、天地之道也。順天之道、節（者）③天之制也。陽者天之寬也。陰者天之急也。中者天之用也。和者天之功也。舉天地之道、而〔莫〕④美於和。

【注】

【校記】

- ① 趙穐明（盧文弨引）に従い、「地」字を補う。
- ② 「奉」 楊樹達『春秋繁露』（『校釋』引）に従い、「泰」に改める。
- ③ 「者」 蘇軾に従い、「者」字を削除する。
- ④ 蘇軾に従い、「莫」字を補う。

【書き下し文】

①天地の經は、東方の中に至りて、生ずる所大いに養ひ、西方の中に至りて、養ふ所大いに成る。一歳に四たび業を起し^レ、必ず中に於てす。中の爲す所は、而ち必ず和に就る。故に「和は其の要なり」②と曰ふ。和は天地の正なり、陰陽の平なり。其の氣最も良く、物の生ずる所なり④。誠に其の和を擇ぶ者は、以て大いに天地の泰を得たりと爲すなり。天地の道に、和ならざる者有りと雖も、必ず之を和に歸すれば、^{すなは}而ち爲す所功有り。中ならざる者有りと雖も、必ず之を中に止むれば、^{すなは}而ち爲す所失なはず。是の故に陽の行は、北方の中に始まり、南方の中に止まる。陰の行は、南方の中に始まり、北方の中に止まる。陰陽の道は同じからざるも、盛んなるに至るも皆中に止まる。其の、始まり起^レる所は、皆必ず中に於てす。中は天地の太極にして、日月の至りて卻く所なり。長短の隆、中を過ぐるを得ざるは、天地の制なり。和と不和と、中と不中とを兼ね、時に之を用ひ、盡く以て功を爲す。是の故に時に時ならざる無き^レは、天地の道なり。天の道に順ひ、天の制を節するなり。陽は天の寛なり。陰は天の急なり^⑤。中は天の用なり。和は天の功なり。天地の道を畢ぐれば、和より美なるは莫し。

① 紀昀（『校釋』引）は、「天地之經」から「天之功也」までは別の一編であるといふ。

② 「四たび業を起す」を、『校釋』は、春生、夏養、秋成、冬藏という四季の仕事とする。

③ 蘇興は、『文子』の、

古の、道を爲す者は、養ふに和を以てし、持するに適を以てし。（古之爲道者、養以和、持以適）

嵇康「養生論」の、

之を守るに一を以てし、之を養ふに和を以てし、和理曰び濟り、大順に同じくす。（守之以一、養之以和、和理曰濟、同平大順）

性を修めて以て神を保ち、心を安んじて以て身を全くす。愛憎は情に棲まず、憂喜は意に留まらず、泊然として感無くして體氣和平なり。（修性以保神、安心以全身。愛憎不棲於情、憂喜不留於意、泊然無感而體氣和平）

を引く。また『校釋』は、『莊子』在宥の、

我れ其の一を守りて、以て其の和に處る。（我守其一、以處其和）

を引く。

④ 凌曙は、『淮南子』氾論訓の、

天地の氣は、和より大なるは莫し。和なる者は、陰陽調ひ、日夜分れて物を生ず。春分にして生まれ、秋分にして成る。生と成とは、必ず和の精を得。故に聖人の道は、寛にして栗、嚴にして温、柔にして直、猛にして仁。太はだ剛なれば則ち折れ、太だ柔なれば則ち巻く。聖人正に剛柔の間に在れば、乃ち道の本を得。陰を積めば則ち沈み、陽を積めば則ち飛ぶ。陰陽相接し、乃ち能く和を成す。（天地之氣、莫大於和。和者、陰陽調、日夜分而生物。春分而生、秋分而成、生之與成、必得和之精。故聖人之道、寛而栗、嚴而温、柔而直、猛而仁。太剛則折、太柔則卷。聖人正在剛柔之間、乃得道之本。積陰則沈、積陽則飛。陰陽相接、乃能成和）

を引く。

⑤ 「時無不時」はよくわからない。『校釋』は「時」とは時を得、時に及ぶを謂ふ。「不時」とは時を失するを謂ふ。此は時を得て時を失はざるは乃ち天地の道なるを謂る」という。ただこれだと「時」と「無不時」は重複するのではないだろか。前文に「和」と「不和」、「中」と「不中」が対応するようだ。」いは「時」と「不時」が対応し、「無」は「與」の形似による誤りではないか。そうすると本文は「時興不時者、天地之道也」となり、「時と不時とは、天地の道なり」と読めないか。意味は「陰陽の進行にしたがつて四時を順序どおり動かす時と動かさない時があるが、それが天地の運行といつものである」。だた証拠となる文献や意見などないのでひとまず、誌して疑を存する。指正を請う。

⑥ 楊樹達（『校釋』引）は、「白虎通」嫁娶篇に「陽道は舒、陰道は促」と云ふは、即ち此の寛急の義なり。又五行篇に「陽舒陰急なるは何に法る。日行遅く、月行疾きに法るなり」と云うとある。

【現代語訳】

天地の不变の営みは、東方の中（春分）になると、生長したものが大きくなり、西方の中（秋分）になると、養われたものが大きく成熟する。（天地は）一年間に（春夏秋冬の）四度仕事を行い、（その仕事は）かならず中（春分・秋分）で行なわれる。中がはじめたことは必ず和で完成する。だから「和がもつとも重要である」というのである。和は天と地の正しいところであり、陰と陽が均等になつているところである。気がもつともよい状態のときであり、物が生長するところである。和を選んで身につけた人は、天地の氣宇・壮大さを体得した人であるといえる。天地の運行に和でないところはあるけれども、かならず和に帰しさえすれば、その行為は成功する。中でないところはあるけれども、かならず中にもどしさえすれば、その行為は失敗しない。そこで陽の進行は北方の中にはじまり、南方の中でおわり、陰

の進行は南方の中にはじまり、北方の中でおわる。陰陽の進行は同じではないが、ごくやう極盛になつてもかならず中でとどまり、はじまり発生するのもからず、中でおこなつ。中は天地の太極であり、日と月（の運行）が到達し反転するといふである。（昼夜の）長短の長さが中を「え（て長くなつたり短くなつたりす）」といふのは、天地の制である。（天地は）和と不和、中と不中を兼ね備え、時に応じて運用し、完全に仕事を完成する。そいだ（陰陽の進行にしたがつて）四時を順序じおりにうこかす（？）のが天地の運行である。天の運行にしたがい、天の制を調節する。陽は天の寛厚の氣であり、陰は天の急切の氣であり、中は天の応用であり、和は天の功績である。天地の運行のうち一番すばらしいものをあげるとすれば、和よりすばらしいものはない。

四

是故物生、皆貴氣而迎養之。孟子曰、我善養吾浩然之氣、（者）〔是〕①也。謂行必（終）〔中〕②禮、而心自齊、常以陽得生其意也。公孫之養氣曰、裏藏、泰實則氣不通、泰虛則氣不足。熱勝則氣（口）〔耗〕③、寒勝則氣（口）〔滯〕④、泰勞則氣不入、泰佚則氣死至。怒則氣高、喜則氣散。憂則氣狂、懼則氣晦。凡此十者、氣之害也。而皆生於不中和。故君子怒則反中、而自説以和、喜則反中、而收之以正、懼則反中、而舒之以意、懼則反中、而實之以精。夫中和之不可不反如此。

【校記】

- ① 「者」 王謙本に従い、「是」に改める。
- ② 「終」 惠棟・董天工・蘇頌などに従い、「中」に改める。
- ③ 「口」 虞文弨は、「舊本『熱勝則氣寒』の下に校語有りて、『此の下疑ぶらへは五字少なし』と云ふ。今案するに、『寒』は當に下句の首と爲すべし、兩句正

に相對して、各おの下の一字少なきのみ」といふ。蘇頌はそれに従い、「氣」の下をそれぞれ空欄とする。「諸子著華錄」本（校釋引）は「熱勝則氣耗、寒勝則氣甚」を作る。『校釋』は、文義に従つて「耗」「滯」の二字を補つ。今ひとまず『校釋』に従つ。

【書き下し文】

是の故に物の生ずるや、皆氣を貴びて迎へて之を養ふ。孟子、「我は善く吾が浩然の氣を養ふ」①と曰ふ、是なり。行ひ必ず禮に中りて、心自ら齊ひ、常に陽得②を以て其の意を生ずるを謂ふなり。公孫の『養氣』③に曰く、「裏藏④、泰だ實つれば則ち氣は通せず、泰だ虚なれば則ち氣は足らず。熱勝れば則ち氣は耗り、寒勝れば則ち氣は滯る。泰だ勞すれば則ち氣は入らず、泰だ佚すれば則ち氣は死至⑤す。怒れば則ち氣は高く、喜べば則ち氣は散す。憂ふれば則ち氣は狂ひ⑥、懼られば則ち氣は懾る。凡そ此の十者は、氣の害なり。而して皆中和ならざるに生ず。故に君子怒れば則ち中に反りて、自ら詭ばすに和を以てし、喜べば則ち中に反りて、之を收むるに正を以てし、憂ふれば則ち中に反りて、之を舒ぶるに意を以てし、懼るれば則ち中に反りて、之を實たすに精を以てす」⑦。夫れ中和の反らざる可かべりいと此の如し。

【注】

- ① 孟子は『孟子』公孫丑上の一節。

曰く、「我れ言を知る、我れ善く吾が浩然の氣を養ふ」。敢て問ふ、「何をか浩然の氣と謂ふ」。曰く、「言ひ難し。其の氣たるや、至大至剛にして以て直く、養ひて害ふいと無ければ、則ち天地の間に塞つ。其の氣たるや、義と道とに配す。是れ無ければ、餓つるなり」。〔口〕 我知言、我善養吾浩然之氣。敢問

何謂浩然之氣。曰、難言也。其爲氣也、至大至剛以直、養而無害、則塞于天地之間。其爲氣也、配義與道、無是、餒也)

② 「陽得」について、劉師培は「『陽得』は疑ふらばは『陽德』と同じ。陽の徳を以て其の意を發生するを謂ふなり。上の浩然の氣を蒙むりて謂る」といつ。こゝでは劉師培に従い「陽德」とみる。

③ 「公孫」は公孫尼を指す。盧文弨は「公孫之養氣曰裏藏」の八字を衍又として

刪去するが、孫詒讓は、「下文は皆公孫尼子の文なり。『御覽』四百六十七引公孫尼子に『君子怒れば則ち血氣説はすに和を以てし、喜べば則ち之を收むるに正を以てす』と曰ふは、此と正に同じ。『養氣』とは蓋し即ち其の篇名ならん。盧刪するは大いに繆る」と云う。さらに蘇興は、董仲舒が性について言う場合はほとんど公孫に基づいており、いに公孫の文を引いたのも、公孫が師承の列にある人だったからであろうといい、『北堂書鈔』引『公孫尼子』の、

太古の人、露を飲み、草木の實を食す。聖人、火食を爲し、燧人と號し、飲食して以て血氣を通す。(太古之人、飲露、食草木實。聖人爲火食、號燧人、飲食以通血氣)

をはじめとして、『文選』沈休文「三月三日詩」注引の『公孫尼子』、『御覽』二十一及七百二十四引の『公孫尼子』などを引く。

また『漢書』藝文志・儒家に『公孫尼子』二十八篇があり、班固の自注に「七十子弟」とある。「養氣」とは『公孫尼子』中の篇名であろう。輯本としては、『問經堂叢書』(孫馮翼輯)、『玉函山房輯佚書』(馬國翰輯)などがある。ただ『玉函山房輯佚書』では下文の「氣不隨也」までを「養氣」の文としている。

④ 「裏藏」は、他には見ない語であるが、凌注の「藏府を謂ふなり」に従つて臍腑の意味といふ。

⑤ 「宛」は、惠棟・董天工・盧文弨が「鬱」とするのに従う。「至」は、楊樹達が「讀みて『翌』と爲す」というのに従う。「鬱鬯」とは、『校釋』によつて「鬱」積不通」という意味といふ。

⑥ 『校釋』は、『韓非子』解老の、

心、得失の地を審らかにする能はざれば、則ち之を狂と謂ふ。(心不能審得失之地、則謂之狂)

を引く。また張之純(『校釋』引)は「狂」を「枉」に改めて、「原と『狂』に作るは非なり。屈して伸ばす能はざるを『枉』と曰ふ。夏は則ち氣屈する所有り」と云う。

⑦ 蘇興は公孫の書の引用は以上だとし、『淮南子』原道訓の、

夫れ喜怒は、道の邪なり。憂悲は、徳の失なり。好憎は、心の過なり。嗜欲は、性の累なり。人大いに怒れば陰を破り、大いに喜べば陽を墜し、薄氣なれば瘡を發し、驚怖すれば狂を爲し、憂悲多患なれば、病は乃ち成を積み、好憎繁多なれば、禍は乃ち相隨る。故に心憂樂せざるは、徳の至りなり。通じて變ざるは、靜の至りなり。嗜欲載せざるは、虛の至りなり。好憎する所無きは、平の至りなり。物と散ざるは、粹の至りなり。(夫喜怒者、道之邪也。憂悲者、徳之失也。好憎者、心之過也。嗜欲者、性之累也。人大怒破陰、大喜破陽、薄氣發瘡、驚怖爲狂、憂悲多患、病乃積成、好憎繁多、禍乃相隨。故心不憂樂、徳之至也。通而不變、靜之至也。嗜欲不載、虛之至也。無所好憎、平之至也。不與物敵、粹之至也)

を引く。

【現代語訳】

「そこで万物が生れるときには、気を重視し、それを血肉にとり入れて養う。孟子が「私は自分の浩然の氣をよく養つて居る」というのがそれである。これは行いがかなはずれにかない、心の底から喜び、つねに陽の徳で自分の気持ちをあらわすという意味である。公孫尼子の『養氣』に、「臍腑がつまりすぎると氣は通じなくなつて、空虚となりすぎる」と氣は消耗し、寒さがま

れると氣は凝滞する。疲れすぎると氣は身体に入らず、なまけすぎると氣は鬱積する。怒ると氣は高揚し、よぶいじぶと氣は発散する。心配」とあると氣はまよい、恐ろしい」とがあると氣は萎縮する。この十者は氣を傷つけるものであり、いつれも中和でないことから生じる。だから君子は、怒ったときには中にたちかえり、和を用いて怒りを解く。よろこんだときには、中にたちかえり、正を用いてひきしめ、心配」とがあるときには、中にたちかえり、精神を用いて充実させる」と云う。そもそも中和にたちかえらなければならないのは以上のとおりである。

五

故君子道至、氣則華而上。凡氣從心。心、氣之君也。何爲而氣不隨也。是以天下之道者、皆言内。「是故先法之内矣」①。心、其本也。故仁人之所以多壽者、外無貪而內清淨、心和平而不失中正、取天地之美、以養其身。是(其)以②(且)氣③多且治。鶴之所以壽者、無宛氣於中。是故食「不」④冰。猿之所以壽者、好引其末。是故氣四越。天氣常下施於地。是故道者亦引氣於足。天之氣常動而不滯。是故道者亦不宛氣。(氣)⑤苟不治、雖滿(不)(必)⑥虛。是故君子養而和之、節而法⑦之、去其羣泰、取其衆和。高臺多陽、廣室多陰、遠天地之和也。故聖人弗爲、適中而止矣。

【校記】

- ① 『校釋』に従い、上文第二節の「是故先法之内矣」の七字を「皆言内」の下に移す。
- ② 「其」 惠棟『校釋』引に従い、「以」に改める。
- ③ 「且」 陶鴻慶に従い、「氣」に改める。

- ④ 餘極に従い、「冰」の上に「不」字を補う。
- ⑤ 「苟不治、雖滿不虛」 虞文昭に従い、「氣苟不治、雖滿必虛」に改める。

【書き下し文】

故に君子、道至れば、氣は則ち華して上る。凡そ氣は心に従ふ。心は氣の君なり。何爲れぞ氣隨はざらんや。是を以て天下の道者①は、皆内を言ふ。是の故に先づ之内に法る。心は其の本なり。故に仁人の壽多き所以は、外貪ること無くして内は清淨、心和平にして中正を失はず、天地の美を取りて、以て其の身を養へばなり。是を以て氣多くして且つ治まる。鶴の壽なる所以は、氣を中に宛する」と無ければなり②。是の故に食冰らざる③。猿の壽なる所以は、好く其の末を引けばなり。是の故に氣四越す④。天の氣は常に下りて地に施す。是の故に道者も亦氣を足より引く⑤。天の氣は常に動きて滞らぬ。是の故に道者も亦氣を宛せず。氣苟しくも治まらざれば、滿つと雖も必ず處。是の故に君子養ひて之に和し、節して之に法り、其の羣泰を去り⑥、其の衆和を取る。高臺は陽多く、廣室は陰多く、天地の和に遠ざかるなり。故に聖人は爲らざして、中に適するのみ⑦。

【注】

- ① 「道者」について、蘇軾は「道者とは養生の道を修むる者を謂る。下同じ。古自以此の稱有り、猶は世俗の人を俗者と稱するが」と云う。
- ② 凌曙は『相應經』の、
大喉は以て故きを吐き、修類は以て新しきを納む。故に生の大壽なる」と量る可からず。(大喉以吐故、修類以納新。故生大壽不可量)
- を引き、『初學記』引の『繁露』は、この一文を「鶴知夜半、鶴之所以壽者、無死氣於中也」と作ること指摘する。

- (3) 飲極は「是故食冰」について、「凌注、『是故食冰』の四字を以て下に屬して義と爲すは非なり。緩に冰を食するの説無し、義に於て取る無し」。且つ『鶴之所以壽者』と『緩之所以壽者』、兩文相對し、「是故食冰」と『是故氣四越』、兩文相對すれば、則ち『食冰』は自ら鶴に屬す。董子の原文は緩ふりくは『是故食不冰』に作るならん。『冰』は『緩』の正字なり。『說文』は『氷』の篆の下に於て重文の『緩』字を出し、『(緩は)俗の氷、緩に從ふ』と曰ふ、是なり。『食不緩』とは、食する所凝滞せざるを謂ふなり。蓋し氣を中に宛ること無し、故に食、緩滯せず。此れ鶴の壽たる所以なり。『相鶴經』に、「大喉は以て故きを吐き、修類は以て新しきを納る」と謂ふ、是なり。淺人但だ氷は冰凍の字たるを知るのみにして、誤りて『不』字を刪し、遂に其の義を失す」という。
- (4) 「越」について、蘇興は「越は猶ほ散の」ときなり。流れて滯らざるを謂ふ」といい、『國語』周語下の、
氣は沈滯せずして、亦散越せず。(氣不沈滯、而亦不散越)
以て沈伏を揚げて、散越を翻む。(以揚沈伏、而翻散越)
- 『淮南子』原道訓の、
眞人之息以踵を引いて、「越、散、義同じきを知る」といつ。
- (5) 蘇興は、『莊子』大宗師の、
眞人の息は踵を以てす。(眞人之息以踵)
- (6) 『老子』二十九章に「聖人甚を去り、奢を去り、泰を去る」とあり、また蘇興は「羣泰とは、即ち泰勞、泰佚、泰實、泰虛の類なり」という。
- (7) 蘇興は、『呂氏春秋』孟春紀の、
室大なれば陰多く、臺高ければ陽多し。陰多ければ則ち蹶き、陽多ければ則ち瘻る、此れ陰陽適せざるの患なり。(室大多陰、臺高多陽、多陰則瘻、多陽則瘻、此陰陽不適之患也)

【現代語訳】

『藝文類聚』卷六一引董生書、『詩名物疏』引董子の、
禮に、天子の宮、清廟を右にし、涼室を左にし、明堂を前にし、路寝を後にす。四室は、以て寒暑を避くるに足りて、高大ならざるなり。夫れ高室は陽に近く、廣室は陰多し。故に室、形に適ひて止む。(禮、天子之宮、右清廟、左涼室、前明堂、後路寝。四室者、足以避寒暑、而不高大也。夫高室近陽、廣室多陰。故室適形而止) を引く。凌露は「天子之宮」以トを」の篇の脱文とする。

そこで君子が道を極めると、気が(足から誘導して)昇華して(頭のほうへ)上昇してゆく。そもそも気は心に従つて発しており、心は氣(を支配する)の君である。どうして気が(心に)従わないことがあらうか。そこで天下の(養生の)道を修めたものはみな内が重要であるといふ。だから最初に内にしたがうのである。心がその(内の)根本のものである。だから力を備えた人が長生きする理由は、外に対する貪欲ではなく、内に対しては清廉潔白で、心の中は平穏で中正を失わず、天地の間に存在するおいしいものを食し、自分の身体を養つてゐるからである。だから気が充満し健康なのである。鶴が長生きする理由は、体内に氣を鬱積させないからである。だから食欲が減退しないのである。猿が長生きする理由は、四肢を充分に伸ばすからである。だから四方に氣が発散するのである。天の氣はつねに上からおりてきて地上にたどり、道を極めたものも氣を(地上に近い)足の方から誘導して引きいれる。天の氣はつねに動いて停滞することはないので、道を極めたものも氣を鬱積させる」とはいふ。もし氣が治まらなければ、充満したとしても余分なものを取り除き、たくさんの方をとりこめる。高い棧橋には陽の氣が多く、広い部屋には陰の氣が多い。そのよつなどいろは天地の和から遠ざかっている

といえる。だから聖人は（高い塔や広い部屋を）建てず、中に相当する（適当な高さ広さの建物を建てる）だけである。

六

法人八尺、四尺、其中也。宮者、中央之音也。甘者、中央之味也。四尺者、中央之制也。是故三王之禮、味皆尚甘、聲皆尚和。處其身、所以常自漸於天地之道。〔男女陰陽〕①、其道同類、一氣之辨也。法天者、乃法人之辨。天之道、櫛秋冬而陰〔氣〕②來、櫛春夏而陰〔氣〕③去。是故古之人、霜降而迎女、冰泮而殺〔内〕〔止〕④、來、與陰俱近、與陽俱遠也。天地之氣、不致盛滿、不交陰陽。是故君子甚愛氣、而游於房、以體天也。氣不傷於以盛通、而傷於不時天并。不與陰陽俱往來、謂之不時。恣其欲而不顧天數、謂之天并。君子治身、不敢違天。是故新社十日而一遊於房、中年者倍新社、始衰者倍中年、中衰者倍始衰、大衰者以月當新社之日。而上與天地同節矣。此其大略也。然而其要皆期於不極盛不相遇、疏春而曠夏、謂不違天地之數。

【注】

類を同じくし、氣の辨を一にす。天に法る者は、乃ち人の辨に法る④。天の道は、秋冬に櫛ひて陰氣來り、春夏に櫛ひて陰氣去る。是の故に古の人、霜降りて女を迎へ、冰泮けて殺止するは⑤、陰と俱に近づき、陽と俱に遠ざかればなり。天地の氣は、盛滿に致らざれば、陰陽を交へず⑥。是の故に君子は甚だ氣を愛みて、房に遊び、以て天を體するなり⑦。氣は以盛通に傷つかずして、不時・天并に傷つく⑧。陰陽と俱に往来せざる、之を不時と謂ふ。其の欲を恣^{ほの}ままにして天の數を顧みざる、之を天并と謂ふ。君子身を治むること、敢て天に違はず。是の故に新社は十日にして一たび房に遊び、中年なる者は新社に倍し、始めて衰ふる者は中年に倍し、中ば衰ふる者は始めて衰ふるに倍し、大いに衰ふる者は月を以て新社の日に當つ⑨。而して上、天地と節を同じくす。此れ其の大略なり。然り而して其の要は皆極盛ならざれば相遇はざるに期し、春を疏んじて夏を曠しくするは、天地の數に遠ざからざるを謂ふ。

【校記】

- ① 劉師培に従い、「男女陰陽」の四字を補う。
- ② 劉師培に従い、「氣」字を補う。
- ③ 「内」 蘇興に従い、「止」に改める。

【書き下し文】

人の八尺に法れば、四尺は其の中なり①。宮は中央の音なり。甘は中央の味なり②。四尺は中央の制なり。是の故に三王の禮、味は皆甘を尚び、聲は皆和を尚ぶ。其の身を處するは、常に自ら天地の道に漸る所以なり③。男女の陰陽は、其の道、皆以人之體爲法)

【説文】

周制は八寸を尺と爲し、十尺を丈と爲すと爲す。人の長さ八尺、故に丈夫と尋と爲す。形有れば則ち聲有り。音の數は五、五を以て八に乘すれば、五八四十。故に四丈にして匹と爲す。匹は、中人の度なり。（音以八相生。故人修八尺。尋自倍。故八尺而爲尋。有形則有聲。音之數五、以五乘八、五八四十。故四丈而爲匹。匹者、中人之度也）

周制は八寸を尺と爲し、十尺を丈と爲すと爲す。人の長さ八尺、故に丈夫と曰ふ。周制の寸尺咫尋常仞の諸もろの度量は、皆人の體を以て法と爲す。（周制爲八寸爲尺、十尺爲丈。人長八尺、故曰丈夫。周制寸尺咫尋常仞諸度量、皆以人之體爲法）

『論衡』氣霊篇の、

人の形一丈なるは、正形なり。男子を名づけて丈夫と爲し、公嫗を尊んで丈人と爲す。（人形一丈、正形也。名男子爲丈夫、尊公嫗爲丈人）

を引く。

② 「宮」は五音のひとつ。五音とは宮・商・角・徵・羽の五つ。「甘」は五味のひとつ。五味とは鹹・苦・酸・辛・甘の五つ。蘇興は、『淮南子』原道訓の、故に音は、宮立ちて五音形^{あら}はる。味は、甘立ちて五味亭^{さだ}まる。（故音者、宮立而五音形矣。味者、甘立而五味亭矣）

を引く。また『校釋』は、『白虎通』五行篇の、

土の味の甘なる所以は何ぞや。中央は中和なり、故に甘し。猶ほ五味甘を以て主と爲すがこときなり。（土味所以甘何。中央者中和也。故甘。猶五味以甘爲主也）

『樂稽耀嘉』（『隋書』音樂志引）の、

五音は宮に非ざれば調はず。五味は甘に非ざれば和せず。（五音非宮不調。五味非甘不和）

を引く。また『繁露』五行之義篇に、

甘は五味の本なり。（甘者五味之本也）

③ 「漸」について蘇興は、「漸は猶は淩潤の」ときなり」とい、天地陰陽篇の、

天地の間に、陰陽の氣有り。常に人を漸す」と、水の常に魚を漸すが若きなを引く。（天地之間、有陰陽之氣。常漸人者、若水常漸魚也）

（會宇康『校釋』引）は「按するに、『論語識』（御覽）九百八十二引）に『闡』に「漸れば則ち芳しく、鮑に漸れば則ち臭し」と云ふは、此の文の『漸』字と義同じ。『義證』訓じて『漸潤』と爲すは是なり」といつて、蘇興の訓を支持する。

④ 蘇興は「辨」について、「辨は治なり。人の自ら治むる所以は、天地の道と相

通す。故に天に法る者は人の自ら治むる所以に法るのみ。人の自ら治むるは、氣より貴きは莫し。故に一氣の辨と云ひ、其の要も亦中和を曰ふのみ」という。

⑤ 蘇興は、「殺内」は當に『殺止』と爲すべし。『殺』は去聲。霜降りてより始めて女を逆へ、冰泮ぐるに及んで殺止するを謂ふなり。霜降りるは九月、冰泮ぐるは一月なり」とい、『孔子家語』本命解の、

霜降りて婦功成れば、嫁輶する者行ふ。冰泮けて農桑起れば、婚禮^{すなは}に殺^{スル}べ。霜降而婦功成、嫁輶行焉。冰泮而農桑起、婚禮而殺干此）

を引く。

⑥ 凌露は、『白虎通』嫁娶篇の、

嫁娶必ず春を以てするは、春は天地交通し、陰陽相接するの時なればなり。

（嫁娶必以春者、春、天地交通、陰陽相接之時也）

を引く。

⑦ 蘇興は、『漢書』藝文志・方技略・房中の、

房中は、性情の極にして、至道の際なり。是を以て聖人、外の樂しみを制して以て内の情を禁じて、之が節文を爲す。樂しんで節有らば、則ち和平壽考なり。迷者顧みざるに及んでは、以て疾を生じて性命を限ず。（房中者、性情之極、至道之際。是以聖人制外樂以禁内情、而爲之節文。樂而有節、則和平壽考。及迷者弗顧、以生疾而限性命）

を引く。

⑧ 「天井」はあまり見かけない語である。そこで各家諸説ある。惠棟（『校釋』引）は、「天井」の二字は衍に似たり」とい、俞樾は、「天井」の二字、義無し。疑ぶらくは當に『弁天』を作るべし。「井」、「弁」と相似たり。傳寫して又誤り倒するのみ。下文に「陰陽と俱に往來せず、之を不時と謂ふ。其の欲を恣まにして天數を顧みず、之を天井と謂ふ」と云ふ。夫れ「天數を顧みず」とは當に『弁天』の謂ひなり、其の誤りを知るべし」という。また蘇興は、「以盛通」は即ち前云ふ所の「極盛相接」なり。『井』は即ち『屏』字、天の屏弃する所と

爲るを言ふ。句例、『莊子』の天刑・天放と同じ」といい、李慈銘は、「案するに『盛通』の上に當に『時』字有るべし。『以時盛通』は下の『不時天井』の句と對す。『天井』は當に『天井』を作るべし。『天井』は『盛』と通じ、反對して文を寫す。形近きを以て訛して『天井』を作る」という。『校釋』は各説をあげて、「案するに、愈・蘇・李の三家の説俱に通ず可し。細しき之を審らかにすれば、蘇説を長ずと爲す」という。

⑨ 蘇興は、『白虎通』五行篇の、

年六十にして房を閉づるは何ぞや。六月に陽氣衰ふるに法るなり。(年六十閉房何。法六月陽氣衰也)

同「嫁娶」篇の、

男子六十にして房を閉づるは何ぞや。衰を輔くる所以なり。故に性命を重んずるなり。(男子六十閉房何。所以輔衰也。故重性命也)

『禮記』内則の、

衰老いたりと雖も、未だ五十に滿たざれば、必ず五日の御に與る。(春雖老、未滿五十、必與五日之御)

日本丹波康頼所撰『醫心方』廿八引『玉房秘訣』の、
年廿は、常に二日に一施。卅は、三日に一施。卅は、四日に一施。五十は、五日に一施。年、六十を過ぎて以て去れば、復た施すこと勿れ。(年廿、常二日一施。卅、三日一施。卅、四日一施。五十、五日一施。年過六十以去、勿復施焉)

を引くが、本文とは少しく内容が異なつてゐる。

【現代語訳】

(標準的な)人の(身長である)八尺を標準とすれば、四尺はその真ん中に相當する。(音階の)宮の音は中央に相當する音、(味覚の)甘は中央に相當する味、四

尺は中央に相当する制度である。そこで(夏・殷・周の)三代の王の礼では、いつれも味は甘を貴び、声は和を貴ぶ。人が自分の身体を(三王の禮に)したがつて生活するのは、つねに自分(の身体)を天地の道の中にたどよわせ、天地と一体となるためである。男女の陰陽は同じ種類のものであり、中和といふ気に支配される。天にしたがうものは、人がみづから統治する氣にしたがつて身体をおさめるのである。天の運行は、秋冬にむかうと陰の気があらわれ、春夏にむかうと陰の気が消えていく。そこで昔の人が、霜が降りるになると嫁を迎へ、水がとけることになるとひかえるのは、陰とともに近づき、陽とともに遠ざかるからである。天地の気が極盛にならなければ、陰と陽が交換することはない。そこで君子は氣をとても大切にし、房中で遊ぶ場合も、天と一体にならうとするのである。気は極盛の時には傷つくことはなく、「不時」「天井」の時に傷つく。陰陽の行にしたがつて往来しないことを「不時」という。欲望のおもむくままに行動して、天の規律をかえりみないことを「天井」という。君子は自分の身体を治める場合でも、天の意にさかひつよつることはしない。そこで青年は十日一度、房に遊び、中年のものは青年の倍「二十日一度」、衰えたものは中年の倍「四十日一度」、やや衰えたものは衰えはじめたものの倍「八十日一度」、かなり衰えたものは青年の日を月にいれかえる「十ヶ月一度」。こうすることによって天地と節度を同じくすることができる。以上がその大略である。しかしその要点は、極盛でなければ房であわないところにつき、春に(房で遊ぶ日が)少なく、夏に行わないので、天地の規律にさからつていないとこういふことである。

神、靜神以養氣。氣多而治、則養身之大者得矣。

【校記】

- ① 譚本『校釋』引に従い、「不」の下に「知」字を補う。

【書き下し文】

民は皆其の衣食を愛むを知るも、其の天の氣を愛むを知らず。天の氣の、人に於けるや、衣食より重し。衣食盡くるも、尚ほ猶ほ間有り。氣盡くれば、而ち立ちどひに終る。故に生を養ふの大なる者は、乃ち氣を愛むに在り。氣は神に従ひて成り、神は意に従ひて出づ。心のいく所を意と謂ふ①。意勞する者は神擾れ、神擾る者は氣少なく、氣少なき者は久しうなり難し②。故に君子は欲を開き惡を止めて以て意を平らにし、意を平らにして以て神を靜め、神を靜めて以て氣を養ふ。氣多くして治まれば、則ち身を養ふの大なる者得らる。

【注】

- ① 蘇軾は、『繁露』天道施の、

萬物動きて形はれざる者は、意なり。(萬物動而不形者、意也)

八

『說文』の、
意は志なり。心音に从ふ。(意、志也。从心音)

- を引く。

- ② 蘇軾は、『司馬遷傳』の、

凡そ人の生くる所の者は神なり、託する所の者は形なり。神大いに用ふれば則ち端き、形大いに勞すれば則ち敝れ、形神離るれば則ち死す。死すれば復

た生くる可からず、離るれば復た合す可からず。故に聖人は之を重んず。(凡人所生者神也、所託者形也。神大用則竭、形大勞則敝、形神離則死。死者不可復生、離者不可復合。故聖人重之) を引く。

【現代語訳】

民は衣服や食物を大切にする」とはわかっているが、天の氣を大切にしなければならないことはわかつてない。天の氣は人にとって衣服や食物よりも大切なものである。衣服や食物がなくなつても補充する」とはできるが、天の気がなくなると(人は) たちどころに死んでしまう。だから生命を養うなかでもっとも重要なことは、気を大切にすることである。気は精神にしたがつて形成され、精神は意にしたがつてあらわれる。「心のむかうといふを「意」という。意が疲労すると精神は乱れ、精神が乱れると気は少なくなり、気が少なくなると長生きしない。だから君子は欲望を抑え、悪をとどめて意を平静にし、意を平静にして精神を静め、精神を静めて気を養う。気が多くなつて(身体が) 健康になると、身体を養つ」とのうちでも「とても重要な」とが達成された」ととなる。

古之道士有言曰、將欲無陵、固守一德。此言神無離形、則氣多內充、而忍饑寒也。和樂者生之外泰也。精神者生之内充也。外泰不若內充。而況外傷乎。忿恤愛恨者、生之傷也。和說(勸善)〔歡喜〕①者、生之養也。君子慎小物、而無大敗也。行中正、聲嚮榮、氣意和平、居處廣樂、可謂養生矣。凡養生者、莫精於氣②。是故春興葛、夏居密陰、秋避殺風、冬避重潔、就其和也。衣欲常潔、食欲常饑、體欲常勞、而無長佚居多也。凡天地之物、乘於其泰而生、厭於其勝而死。四時之變是也。故冬

之水氣、東加於春而木生、乘其泰也。春之生、西至金而死、厭於勝也。生於木者、

至金而死。生於金者、至火而死。春之所生、而不得過秋。秋之所生、不得過夏。天之數也。飲食臭味、每至一時、亦有所勝、有所不勝。之理不可不察也。

ある義證本に従つておくることとする。

【書き下し文】

【校記】

① 「勸善」 蘇興に従い、「歎喜」に改める。

② この前後、校者によつて処理の仕方に違ひがある。各本は「莫精於氣」の下に「此物獨生」(本篇第十節)が接続し、篇末にいたる。盧文昭は「此の下、舊本『故天下之君』の五字を衍す。又誤りて下巻天地之行篇中の語『此物獨死』より『大可見矣』(本篇第十節)の九十七字を出す。今改めて下篇に歸す」とい、「此物獨死」から「大可見矣」までの九十七字は天地之行篇の文だと考へて下篇に移動させ、「莫精於氣」の下に「是故男女體其盛」(本篇第十一節)を続ける。また張惠言は「此の下當に下篇の『是故春襲』に接し、『羣物皆生而』(本篇第十節)に至りて止まり、再び『此物獨死』に接して末に至るべし」とい、蘇興はそれに従つている。さらに惠棟は「是故春襲」の四十字は應に「行中正」の上に在るべし」とい、『校釋』はそれに従つて「是故春襲」の四十字を「行中正」の上に移し、さらに盧文昭に従つて「此物獨死」から「不可見矣」を下篇(天地之行篇第七十八)に移し、「莫精於氣」の下に「是故男女體其盛」を続けている。つまり張惠言も惠棟も「是故春襲」以下を移動させるが、張惠言は三百八十三字を移すのに比べて、惠棟は冒頭の四十字を移すにすぎない。また移動させる場所も張惠言は「莫精於氣」の下であるのに対し、惠棟は「行中正」の上という違ひがある。また張惠言は「羣物皆生而」(本篇第十節)の下に「此物獨死」から「大可見矣」までを続けるのに対し、惠棟は「此物獨死」から「大可見矣」までを続けるのに対し、惠棟は「此物獨死」から「大可見矣」を盧文昭に従つて下篇に移し、「莫精於氣」の下に「是故男女體其盛」を続けている。ただあまり移動させすぎるとかえつて混乱するので、いじなりあえず定本で

【注】

① 古の道士言 蘇興は、「漢書 藝文志の道家に追家言一篇有り、道士の言とは蓋し其の類ならん」といつ。

② 「陵」は、衰えるの意。今、『今註今譯』が「陵替、衰敗」の意とし、『校釋』

が「衰替」の意とするのに従う。

- (3) 蘇軾は、「王應麟云ふ、『老子』谷神の一章、養生者は焉を宗とす。董子の此の文の數語も亦此れに得る有り」と言つ。王應麟の語は、『困學紀聞』卷十諸子の項に。

(『老子』の)谷神の一章は、養生者焉を宗とす。『春秋繁露』に謂ふ、「生を養ふの大なる者は、氣を愛むに在り。欲を閑ぎ悪を止め以て意を平らかにし、意を平らかにして以て神を靜め、神を靜めて以て氣を養ふ。古の道士に言有りて曰く、「將に陵する」と無からんと欲すれば、固く一徳を守る」と。此れ神形を離ること無ければ、則ち氣多く内に充つ」と。董子も以此に得ること有り。(谷神一章、養生者宗焉。春秋繁露謂養生之大者在愛氣、閑欲以平意、平意以靜神、靜神以養氣。古之道士有言曰、將欲無陵、固守一徳。此言神無離形、則氣多内充。董子亦有得於此)

とある。

- (4) 「泰」は、安らかさの意。『今註今譯』は「通達、舒張」の意とし、『校釋』は「安適」の意とする。

「精神」について、凌曙は、「白虎通」卷八情性に、「精神」は、『白虎通』卷八情性に、「精神」に何をか謂ふ。精は靜なり。太陰施し化するの氣なり。火の化して生ずるに象るなり。神は恍惚にして、太陰の氣なり。(精神者何謂也。精者靜也。太陰施化之氣也。象火之化任生也。神者、恍惚、太陰之氣也)

とあるのを引く。なおこの引用箇所は陳立『白虎通疏證』は一部文字を改めてい

る。以下に示す。傍縁部が文字が異なる箇所である。

精神とは何をか謂ふ。精は靜なり。太陰施し化するの氣なり。水の化するに象り、須く任生するを待つべきなり。神は恍惚にして、太陽の氣なり。(精神者何謂也。精者靜也。太陰施化之氣也。象水之化、須待任生也。神者、恍惚、太陽之氣也)

- (6) 「重澤」、「澤」は温氣の意。温度の高い場所と訳しておぐ。盧文弨は「澤」

は「溼」に作るべきではないかと言つが、愈樾が「澤」と「溼」とは同じであるとするのに従い、そのままにしておぐ。

- (7) 「居多」 蘇軾は「居多」の二字を衍字ではないかと言い、『太平御覽』引『公孫尼子』に、

孔子疾有り、哀公醫をして之を視しむ。醫曰く、子の居處飲食何如と。孔子曰く、丘、春には葛籠に居り、夏には密陽に居り、秋は風せず、冬は煩かず、飲食饋らず、飲酒勤めずと。醫曰く、是れ良藥なり。(孔子)有疾、哀公使醫視之。醫曰く、子居處飲食何如。孔子曰、丘春居葛籠、夏居密陽、秋不風、冬不煩、飲食不饋、飲酒不勤。醫曰、是良藥也)

- とあるのを引く。今は劉師培が「多は侈と同じ」とするのにより、「居多」を浪費するの意として、そのままにしておぐ。

- (8) 「校釋」は、『易』泰卦の象に、

天地交はるは、泰なり。后以て天地の道を財成し、天地の宜しきを輔相す。

(天地交、泰。后以財成天地之道、輔相天地之司)

とあるのを引き、天地陰陽の氣が交わって万物が生まれることを意味するといつ。

- (9) 「勝」 五行相克の考え方。木は土に勝ち、土は水に勝ち、水は火に勝ち火は金に勝ち、金は木に勝つ。五行相勝説の考え方に基いて諸事を捉えた内容が『繁露』五行相勝第五十九に見える。詳細は、拙稿『春秋繁露』訳注稿 五行関係諸篇(高松工業高等専門学校紀要第二十八号、一九九二)参照。

- (10) 凌曙は、『孔子家語』に、

孔子曰、陰陽を化し、形に象りて發す、之を生と謂ふ。化窮まり數盡く、之を死と謂ふ。(孔子曰、化於陰陽、象形而發、謂之生。化窮數盡、謂之死)

とあるのを引く。また『新譯』は『淮南子』蹟形訓に、木は土に勝ち、土は水に勝ち、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝つ。故に木は春に生じて秋に死し、菽は夏に生じて冬に死し、麥は秋に生じて夏に死し、蕷は冬に生じて中夏に死す。(木勝土、土勝水、水勝火、火勝金、

金勝木。故禾春生秋死、蕡夏生冬死、麥秋生夏死、蕡冬生中夏死) とあるのを引く。

- (11) 五行相生説。木が火を生じ、火が土を生じ、土が金を生じ、金が水を生じ、水が木を生ずる。五行相生説の考え方に基いて諸事を捉えた内容が『繆露』五行之義第四十二、五行相生第五十八などに見える。詳細は、拙稿『春秋繆露』訳注稿「五行關係諸篇」(高松工業高等専門学校紀要第二十八号、一九九二) 参照。
- (12) 蘇興は、『淮南子』墜形訓(注⑩参照)に、

故に禾は春に生まれ秋に死す。(故禾春生秋死)

禾は木、春は、木王^{さか}にして生れ、秋は、金王^{おう}にして死す。(禾者木、春、木王而生、秋、金王而死)

- (13) 蘇興は、『淮南子』墜形訓(注⑩参照)に、

麥は秋に生まれ夏に死す。(麥秋生夏死)

麦は金なり。金王^{おう}にして生れ、火生れて死す。(麥、金也。金王而生、火生而死)

はあるのを引く。

- (14) 蘇興は「有所不勝」で句読、「之理」の二字を下句につづけ、「之は猶ほ此の」としと注し、『校釋』は「之理」の二字を上句につづけ、「理」で句読する。今は蘇興に従つておく。

九

四時不同氣、氣各有所宜。宜之所在、其物代美。視代美而代(養)〔食〕①之、同時美者雜食之。是皆其所宜也。故蕡以冬美、而荼以夏成。此可以見冬夏之所宜服矣。冬、水氣也。蕡、甘味也。乘於水氣而美者、甘勝寒也。蕡之爲言濟興。(所以)②濟大水也。夏、火氣也。荼、苦味也。乘於火氣而成者、苦勝暑也。天無所言而意以物。物不與羣物同時而生死者、必深察之。是天之所以告人也。故蕡成告之甘、荼

【現代語訳】

昔の道士は「衰えたくないければひとつの徳をかたく守らなければならない」という。これは精神が形体を離れなければ、気は体内に充満し、飢えや寒さに耐える」

とができるところをつけてくる。和樂は生命外部の安らかさであり、精神は生命内部の充実である。外部の安らかさは内部の充実にはおよばず、ましてや外部が傷つくことはなおさらである。忿懥憂恨(怒りや憂い)は生命を傷つけるものである。和讃歡喜(和らぎや喜び)は生命を養うものである。君子は小さなことを慎重に行うので、大きな失敗はしない。行いが中正であること、声の響きが柔んであること、ここにもちが平和であること、住むところが安楽であることは生命を養つているといえる。そもそも生命を養うもののうちで、気より精密なものはない。そこで春に葛の服を重ね着し、夏に涼しい場所ですこし、秋に身を切るような風にあたらぬようにし、冬に湿度の高い場所を避けるのは、和に近づくことである。衣服はいつも清潔にし、食事はいつも八分目にし、身体はいつも動かそうとすれば、長期に安逸をむさぼり、浪費することもない。そもそも天地の万物は春によって生まれ、勝に圧せられて死ぬ。四時の変化がそれである。だから冬の水気が東に向かい、春になると木が生じるのは、春に乗りたからである。春に生れたものが西に向かい、金になると死ぬのは、勝に圧せられたからである。金で生れたものは火になると死ぬ。春に生まれたものが秋をすぎて生きつづけることはできず、秋に生まれたものが夏をすぎて生きつづけることができるのは、天の規律である。飲食臭味は季節ことに飲食に適するものと適しないものがある。この道理はよく理解しておかなければならぬ。

成告之苦也。君子察物（而成）〔成而〕③告讞。是以至薺不可食之時、而盡遠甘物、至荼成就也。天所獨代之成者、君子獨（代）〔食〕④之。是冬夏之所宜也。春秋雜（物）〔食〕⑤其和、而冬夏代服其宜、則（當）〔常〕⑥得天地之美、四時〔之〕⑦和矣。

【校記】

- ① 「養」 惠棟（校釋）引に従い、「食」字に改める。
 ② 『太平御覽』卷九百八十に引くこの箇所が「所以濟大水也」となつており、劉師培に従つて「所以」の二字を補つ。

- ③ 「而成」 蘇軾に従い、「而」と「成」をいれかえる。

- ④ 惠棟は「天所獨代之成者、君子獨代之」の十二文字を削除する。また董箇本は「君子獨代之」を「君子獨食之」に作り、盧文弨は「君子獨代」の下に一字欠けていふようだと言ひ、冒廣生（『校釋』引）は「君子獨代」の下に「生」字を脱すると言ひ。『校釋』は董箇本が「君子獨食之」に作るのが意味が通ると言ひ。今、董箇本に従い「代」を「食」に改める。

- ⑤ 「物」 蘇軾に従い、「食」に改める。

- ⑥ 「當」 董箇本・孫詒讓に従い、「常」字に改める。
 ⑦ 董箇本に従い、「和」の上に「之」字を補つ。

濟か③。大水を濟す所以なり。夏は火の氣なり。荼は苦味なり。火の氣に乗じて成るは、苦、暑に勝てばなり④。天言ふ所無くして意するに物を以てす。物の、羣物と時を同じくして生死せざる者は、必ず深く之を察せよ。是れ天の、人に告ぐる所以なり。故に薺成れば之に甘を告げ、荼成れば之に苦を告ぐるなり。君子は物の成るを察して告げ讞しむ。是を以て薺食す可からざる時に至りては、盡く甘き物を遠ざけ、荼の成るするに至るなり⑤。天、獨り之に代へて成す所の者は、君子獨り之を食す。是れ冬夏の宜しき所なり。春秋は其の和を雜へ食し、冬夏は代るがはる其の宜しきを服すれば、則ち常に天地の美・四時の和を得。

【注】

- ① 「薺」は、なづな。凌闇は『廣韻』に「薺は甘菜なり」とあるのを引く。「荼」は、にがな。凌闇は『爾雅』釋草に「荼は苦菜なり」とあるのを引く。

蘇軾は、『白虎通』八風篇に、
 昌^{しょう} 杏^{あん}風^{ふう}至りて、^{しりて} 薺^{せん}麥^{めい}を生^なず。 (昌^{しょう}杏^{あん}風^{ふう}至^し 生^な薺^{せん}麥^{めい})

とあり、『西京雜記』に載せる董仲舒『園釋對』に、

建巳の月を純陽と爲し、都^{すゝ}て陰に復る^{かへ}と無かるべからざるなり。但^{たゞ}陽氣の極なるのみ。薺麥枯^{かぢ}るは、陰の殺すに由るなり。建亥の月を純陰と爲し、都^{すゝ}て陽に復る^{かへ}と無かるべからざるなり。但^{たゞ}陰氣の極なるのみ。薺麥始めて生^なずるは、陽の升る^{のぼ}に由るなり。(建巳之月爲純陽、不容都無復陽也。但陽氣之極耳。薺麥枯^{かぢ}、由陰殺也。建亥之月爲純陰、不容都無復陰也。但陰氣之極耳。薺麥始生、由陽升也)

とあるのを引く。また凌闇は『詩』谷風に、
 其の甘きこと薺の如し。(其甘如薺)

とあるのを引く。

四時は氣を同じくせず、氣は各おのの宜しき所有り。宜しきの在る所、其の物代はるがはる美なり。代^しはるがはる美なるを視て代^しはるがはる之を食し、時を同じくして美なる者は之を雜^{まじ}へ食す。是れ皆眞の宜しき所なり。故に薺は冬を以て美にして、荼は夏を以て成る①。此れ以て冬夏の宜しく服すべき所を見る可し。冬は水の氣なり。薺は甘味なり。水の氣に乗じて美なるは、甘、寒に勝てばなり②。薺の言爲る

② 凌闇は、『爾雅』釋草に、

薺は薺の實なり。(薺、薺實)

とあり、『淮南子』墜形訓に、

薺は冬に生じ、仲夏に死す。(薺冬生、仲夏死)

とあり、その高誘注に、

薺は水なり。冬は水王^{さか}にして生れ、土王^{わか}にして死す。(薺、水也。冬水

王而生、土王而死)

とあり、「廣韻」に「甘菜なり」とあるのを引く。これらにすれば、薺は實をつけ、甘く、五行では「水」に属し、従つて「冬」に配當され、そのため冬に生じ、土の盛んな夏に死ぬのだとう。さいた『金匱玉衡』に、

冬至れば、陽氣は子に在り、萬物蟄藏す、薺麥の類、冬を得て始めて生ず、皆正氣に非す。(冬至、陽氣在子、萬物蟄藏、薺麥之類、得冬始生、皆非正氣)

とあるのを引く。

(3) 凌曙は『釋名』に、

薺は濟なり。其れ諸もろの味相濟成するなり。(薺、濟也。其諸味相濟成也)とあるのを引く。

(4) 蘇軾は、『淮南子』時則訓に、

孟夏、其の味は苦。(孟夏、其味苦)

とあり、その高誘注に、

火の味は苦なり。(火味、苦也)

とあり、また『白虎通』五行篇に

火味、苦き所以は何ぞ。南方は長く養ふを主とし、苦きは長く養ふ所以なり。猶ほ五味は苦きを須ちて以て養ふ可きが」ときなり。(火味所以苦也。南方主長養、苦者所以長養也。猶五味須苦可以養也)とあるのを引く。『校釋』は董箠の「苦の性は涼」を引いて、苦の性は涼なので暑熱に勝つことができるところ。

⑤ 「荼の成就するに至るなり」 董箠は「疑ふらばは闕文あらん」と言ひ、冒廣

生(『校釋』引)は「疑ふらばは『而盡惡苦物』の五字を脱するならん」と言ひ。確かにここは意味が十分には取りにくく。「荼の成就するを至すなり」と読み、「荼が成就するのを待つ」と解するのもであるか。『校釋』は「仲夏に薺死し、薺食すべからざるの時に至れば則ち盡^{ハシマリ}べ甘き物を遠ざけ、直ちに荼の成熟するに到りてそれを食す」の意に解し、董箠、冒廣生の両説を否定している。

【現代語訳】

四季はそれぞれ氣が異なつており、氣にはそれぞれ時宜にかなう時がある。時宜にかなつた時に万物はかわるがわるおこしくなる。かわるがわるおこしくなるものをみつけて、かわるがわるそれを食べ、同時に(それ以外の)おこしいものを適度にまじえて食べる。だから薺は冬におこしく、荼は夏に成熟する。これは冬と夏に食用に適するものがなにであるかといひことを示している。冬は水の氣であり、薺は甘い。水の氣によつておいしくなるのは、甘さが寒さに勝つてゐるからである。薺の意味は濟であるうか。大水を成す理由である。夏は火の氣であり、荼は苦い。火の氣によつて成熟するのは、苦さが暑さに勝つてゐるからである。天は何もいわずに物に託して(自分の)意志を示す。群物と同時に生まれたり死んだりしない物(があるのはなぜかといひ)とば(その理由を)深く推察しなければならない。それは天が人に(なにかを)告げてゐるのである。だから薺が成熟するのは、(天が人に)甘いものを食べる時期だといひことを告げており、荼が成熟するのは、(天が人に)苦いものを食べる時期だといひことを告げてゐるのである。君子は物が成熟するのを觀察して、(人々に物が成熟したことを)告げて注意をうながす。そこで薺が食べられなくなる頃になると、甘い物をすべて遠ざけて食べず、荼が成熟するに至つてそれを食べる。天だけがかわるがわる成熟させるものは、君子だけがこれを食べる。これは冬と夏それぞれの時期に適したものである。春と秋には中和

したものをおじえ食し、冬と夏にはそれぞれの時期に適するものを食べれば、いつも天地におけるおいしいものと四時の和を手に入れる」ことができるのである。

十

凡擇味之大體、各因其時之所美、而違天不遠矣。是故當百物大生之時、羣物皆生、而此物獨死。可食者、告其味之便於人也。其不食者、告殺穢除害之不待秋也。當物之大枯之時、羣物皆死、如此物獨生。其可食者、益食之、天爲之利人、獨代生之。其不可食者^②、益棄之。天惑州華之間、故生宿麥、中感而熟之。君子察物之異、以求天意、大可見矣。

【校記】

① 董天工（『校釋』引）に従い、「者」字を補う。

【書き下し文】

凡そ味を擇ぶの大體は、各おの其の時の美とする所に因れば、^{すなは}而ち天に違ふこと遠からず。是の故に百物大いに生ずる時に當たりては、^{すなは}羣物皆生ずるも、^{よし}而も此の物獨り死するのみ。食す可き者は、其の味の、人に便なるを告ぐるなり。其の食せざる者は、穢を殺ぎ害を除くの、秋を待たざるを告ぐるなり。物の大いに枯るの時に當たりては①、羣物皆死するも、如も②此の物のみ獨り生ず。其の食す可き者は、^{よし}益ます之を食し、天、^{よし}之が爲に人を利し、獨り代はるがはる之を生す^③。其の食す可からざる者は、^{よし}益ます之を^{よし}畜^{よし}す^④。天、州華^⑤の間を^{よし}懸^{よし}む、故に宿麥を生じ^⑥。中歳にして之を熟す^⑦。君子は物の異を察して、以て天の意を求むる^いと、^{よし}大いに見る可^い。

【注】

①

「當物之大枯之時」 董衡は「當百物大枯之時」に作るべきだと言つ。確かに本節中に「當百物大生之時」という表現も見え、「當百物大枯之時」の方が形は整つが、「當物之大枯之時」でも意味は通るので一応そのままにしておく。

②

「如」 愈棟が「如」は即ち「而」の字なりと言ひ、官本（『校釋』所収）に「如」「而」通すと言うのに従い、^{いゝ}では「しかも」と訓しておく。

③

「天爲之利人、獨代生之」 愈棟は「の九字を削除するが、このままにしておく。

④

「其の食す可からざる者は、益ます之を畜^{よし}す」 ^{いゝ}の「畜^{よし}」は、たくわざる、たまるの意とする。『校釋』は、「畜^{よし}」を「養う」の意とし、^{いゝ}は上の「天、之^{よし}」が爲に人を利し、獨り代はるがはる之を生す^{いゝ}を承けて言つており、「不可食」の「不」の字は衍字ではないかと書つ。一説としてねぐ。

⑤ 「州華」について、盧文弨は、「州華之間」の四字疑ぶらばは誤りならん」といへ。『校釋』は、董衡に

州は中州。華は華夏。（州、中州。華、華夏）

とあり、劉師培が、

今、州、澤を考するに古は通ず。『淮南子』本經訓に云々、「堯は乃ち羿をして^{よし}蠶齒を^{よし}蟲華の野に誅せしむ」と。その高誇注に「蟲華は南方の澤の名なり」と。『文選』辨命論注に引く「野」は「澤」に作る。是れ蟲華は多水の區とも爲す。董子の言ふ所は、或いは即ち斯の地ならん。（今考州澤古通。『淮南子』本經訓云、堯乃使羿誅蠶齒於蟲華之野。高注、蟲華、南方澤名。『文選』辨命論注引「野」作「澤」。是蟲華爲多水之區。董子所言、或即斯地）と語うのを引いて、董衡が「州」を中州と釈するのは是であるが、「華」を華夏と解釈するのは是ではないとする。また「華」は華山を指す。「州華之間」とは

豫州・雍州の、宿麦を植えるのに適する地のことだとし、劉説も確かではないとする。

⑥ 凌曙は、『漢書』食貨志所収董仲舒説に、

春秋は、他穀は書かず、麥禾成らざるに至りては則ち之を書き、此を以て聖人、五穀に於て是最も宿麦を重んずるを見る。(春秋他穀不書、至於麥禾不成則書之、以此見聖人於五穀最重宿麥)

とあるのを引く。宿麦が人々の食糧として重視されていたことが分かる。また『漢書』武帝紀に、

謁者を遣り、水災有る郡に宿麦を種つてを勧めしむ。(遺謁者勸有水災郡種宿麦)

とあり、その顔師古注に、

秋冬に之を種ふ、歳を経て乃ち熟す、故に宿麦と曰ふ。(秋冬種之、經歲乃熟、故曰宿麥)

とあるのを引く。これによれば、秋冬に種をまいて、次の歳に実ることから宿麦というのだと云う。さらに『氾勝之書』に、

凡そ田の六道、麥を種つるを首と爲す。子富まんと欲すれば、黄金の覆ひせよ(…)-とは、柴を曳きて麥根を壅ふを謂ふなり。夏至の後七十日、寒地に宿麦を種つる可し。(凡田六道、種麥爲首。子欲富、黄金覆、謂曳柴壅麥根也。夏至後七十日、寒地可種宿麥)

とあるのを引く。この『氾勝之書』は『齊民要術』大小麥第十に見える。さらに

陶隱居(陶弘景)出典不詳)が、
麥に大小の穢有り。穢は即ち宿麦なり。(麥有大小穢。穢即宿麥)
と言つて引く。

⑦ 「中歲」半年の意。『今註今譯』に従う。

そもそも食べ物をえらぶときの基準は、その時においしいものをえらべば、天の意志とかけはなれることはない。そこで百物が大いに生まれる時には、群物はすべて生まれるのに、その時にだけ死ぬ物がある。これは食べられるものは、(天が)その味が人に都合がよいことを告げている。食べられないものは、(天が)汚れや害を取り除くのは秋を待つ必要がないことを告げている。百物がすべて枯れる時は、群物はすべて死ぬのに、その時にだけ生まれる物がある。食べられるものはますます食べられてしまうので、天はそのために人に利益を与えるようとして、かわるがわる(食べられる物を)生みだしてゆく。食べられないものはますますたまっていくので、天は州華の人々をあわれんで、宿麦を生み、半年で成熟させる。君子は物がなぜ(このように)異なるのかをよく考えて、天がどのよくな意をそこにあらわそうとしたのかを推測すると、とてもよくわかる。

十一

是故男女體其盛、臭味取其勝、居處就其和、勞佚居其中、寒煖無失適、饑飽無過平、欲惡度理、動靜順性、喜怒止於中、憂懼反之正、(此)①中和常在乎其身。(此)①謂之得天地泰。得天地泰者、其壽引而長。不得天地泰者、其壽傷而短。短長之質、人之所由受於天也。是故壽有短長、養有得失。及至其末之大卒、而必離於此、莫之得離。故壽之爲言猶離也。

天下之人雖衆、不得不各離其所生、而壽天於其所自行。自行可久之道者、其壽離於久。自行不可久之道者、其壽亦離於不久。久與不久之情、各離其生平之所行、(今)如(命)②後至、不可得勝。故曰、壽者離也。然則人之所自行、乃與其壽天相益損也。其自行佚而壽長者、命益之也。其自行端而壽短者、命損之也。以天命之所損益、疑人之所得失、此大惑也。是故天長之而人傷之者、其長損。天短之而人養之者、其短益。夫損益者皆人、人其天之繼歟。出其質而人弗繼、豈(獨立)「不哀」③哉。

【校訛】

① 「此」 蘇興に従い、「此」字を下文の「謂」の上に移す。

② 「今如」 陶鴻慶に従い、「如命」に改める。
③ 「豈獨立哉」 凌曙・蘇興・盧文弨に従い、「豈不貞哉」に改める。

【書き下し文】

是の故に男女は其の盛んなるを體し、臭味は其の勝を取り、居處は其の和に就き、勞佚は其の中に居り、寒煖は適を失する無く、饑飽は平を過ぐる無く、欲惡は理を度り、動靜は性に順ひ、喜怒は中に止まり、憂懼は之を正に反せば、中和は常に其の身に在り。此れ之を天地の泰を得①と謂ふ。天地の泰を得る者は、其の壽引きて長し。天地の泰を得ざる者は、其の壽傷つきて短し。短長の質は、人の由りて天に受くる所なり。是の故に壽に短長有り、養に得失有り。其の末の大卒に至るに及んでは②、而ち必ず此に離し、之を離れるを得る莫し。故に壽の言爲る、猶ほ離の」ときなり③。

天下の人衆しと雖も、各おの其の生ずる所に離せざるを得ずして、壽夭は其の自ら行ふ所に於いてす。自ら久しかる可きの道を行ふ者は、其の壽久しきに離す。自ら久しかる可からざるの道を行ふ者は、其の壽も亦久しかざるに離す。久しきと久しきざるとの情は、各おの其の生平の行ふ所に離し、如して④命は後れて至り、勝を得可からず。故に「壽は離なり」⑤と曰ふ。然らば則ち人の自ら行ふ所は、乃ち其の壽夭と相益損するなり。其の自ら佚を行ふも壽長き者は、命之を益すなり。其の自ら端しき⑥を行ふも壽短き者は、命之を損ふなり。天命の損益する所を以て、人の得失する所を疑ふは、此れ大いなる惑ひなり。是の故に天之を長くするも人之を傷つくる者は、其の長きは損なる。天之を短かくするも人之を養ふ者は、其の短

きは益さる。夫れ損益する者は皆人なり。人は其れ天の繼か。其の質を出だして人繼がざるは、豈に哀しからずや⑦。

【注】

① 「天地の泰を得る」「泰」については、本篇第八節の注④及び注⑧参照。『校釋』は『易』泰九二（『校釋』は「九三」とするが「九一」の誤り）の爻辞「中行に尚ることを得ん」（得尚于中行）の「中行」を「中道」の意とし、「天地の泰を得る」とは、「天地中和の道を得る」の意とする。今、これに従う。

② 「及至其末」大卒について孫詒讓は「末々」は「末也」、「大卒」は「大率ではないか」と言ひ、『校釋』はそれを是とし、「其の末に至るに及ぶや、大率にして必ず此に離す」と讀んでゐる。一説としておぐ。

③ 「離」 応する、一致するの意。凌曙は、『漢書』律曆志に、廣延宣問して、以て星度を考するに、未だ能く離せざるなり。（廣延宣問、以考星度、未能離也）

とあり、その注に

鄭德曰く、相應するを離と曰ふ。（鄭德曰く、相應曰離）

とあるのを引く。また『校釋』は、董篤に「離、酬、通」であるのを引く。また盧文弨は「離と酬・傳と並びに同じ」と言ひ、『詩』大雅、蕩之什、「抑」の「無言不離」の箋に

惠は順なり。教令をそれ出だすは物を賣るが如し。物善ければ則ち其の售賈貴く、物悪ければ則ち其の售賈賤し。（惠順也。教令之出如賈物。物善、則其售賈貴、物惡、則其售賈賤）

とあるのを引く。

④ 「如」「しかうして」と読む。蘇興が「如」「而」同じ」と言ひ。

⑤ 「壽は離なり」先に「壽の言爲る、猶ほ離の」ときなり」と見える。寿命の

長短と人の行為とが一致する」とを意味する。注③参照。

⑥ 「端」は端正、正しいことの意。蘇興は「端」字は誤りではないかと言い、冒廣生(『校釋』引)は「端」は「勞」に作るべきだという。『校釋』は蘇興、冒廣

生の両説を上下の文意がはつきりしないとして否定する。

⑦ 「豈に哀しからずや」ここでは本節の校記③で示したとおり、もともと「豈獨立哉」を凌曙・蘇興・虚文詔に従い、「豈不哀哉」に改めて解釈している。『校釋』は「其の質を出だして人繼がざる(天がせつから本質を出だして人に与えているのに、人が繼承しない)」ことで、人を「天地の中に独立し、天地と參する(天地どつりあつ)」存在としてじらう。宋本、殿本が「豈獨立哉」と作るのを是とし、虚文詔説を非とする。一説としておく。

【現代語訳】

そこで男女は天の盛大さを体得し、食物は(天が与えてくれた)勝れたものを食し、平和なところに住み、仕事や楽しみはやりすぎず、暑さ寒さは適度にし、食事は腹八分目にし、欲望好惡は常識を考え、行動は性にしたがい、喜怒は中位にとどめ、憂懼は正常にもとせば、中和はつねに(自分の)身体に存在する。このような状態を天地の中和の道を得ているといふ。天地の中和の道を得たものは、長生きし、天地の中和の道を得ていないものは早死にする。寿命の長短は、人が天から授けられたものである。そこで寿命に長い短いがあり、身体の保養の仕方に良し悪しがあるのである。人が亡くなる時には、かららず天から授けられた寿命に一致し、そこから逸脱することはできない。だから寿という言葉は壽と同じなのである。

天下にたくさん人はいるが、それぞれその生れたところに一致し、長生きするか早死にするかはその人の行為によつて決まる。長生きできるやりかたを行うものは、その寿命は長生きすることに一致し、長生きできないやりかたを行つものはその寿命も長生きできないことに一致する。長生きするか長生きしないかという表情はそ

れぞれ彼らの平生の行為に一致し、天命はあとからついてきて、天命が行為に勝ることはない。だから「寿は壽である」というのである。そうすると人の行為が彼の壽命をふやしたりへらしたりする。安逸なことを行つていて寿命が長いのは天命がふやしたのである。正しいことを行つていて寿命が短いのは、天命がへらされたのである。天命がふやしたりへらしたりすることで人の得失を疑うのはとても迷惑である。そこで天が長生きさせても人が自分で傷つけたものは寿命がへらされる。天が早死にさせようとしても人が自分で保養したものは、寿命がふやされる。そもそも寿命がふえるかはまったくその人次第である。人は天を繼承していくのであろうか。天がせつから本質を出だして人に与えているのに、人が繼承しないというのはなんと哀しいことではないか。